いのちと地域を守る

語り部から

安倍志摩子さん(51)

「救助のプロ」も油断

震災当時住んでいた東松島市野蒜で建物ごと津波に流されました。

私と夫は水中土木工事の仕事をしています。服を着たまま泳ぐ「着衣泳」の指導者でもあります。いわば水難救助のプロです。それでも油断をしてしまいました。

自宅、会社は隣接して海のすぐそばにありました。「津波はこの場所には来ない」と信じていました。間違いでした。震災後に知りましたが、１０００年前に津波が来ていたのです。

地震発生から1時間後、夫と2人で自宅の玄関先で避難しようかどうか迷っていると、津波が押し寄せてきました。私は自宅、夫は会社の2階に駆け上がりました。

すぐにそれぞれの建物が、近くの川に流され始めました。二つの建物が接近した時に、夫に手を引かれ、会社に乗り移りました。しばらくすると、大きな音とともに屋根や壁がなくなり、4畳半ぐらいの床板だけが残りました。

橋に衝突したようでした。その衝撃でけがをした夫とともに床板に乗ったまま、川を約7㌔さかのぼりました。上流で岸に上がり、奇跡的に助かりました。その間、何度も「死ぬんじゃないか」と思いました。

佐藤　麻紀さん(41)

児童避難 先生に促す

生まれ育った石巻市雄勝町で被災し、病院に入院していた実の祖母と迎えに行った母を津波で亡くしました。

震災当日、揺れの大きさから津波が来ると直感しました。小さなころから家族に津波の怖さを聞かされてきたからです。小学校に向かうと、2人の子どもたちは夫の父が連れ帰っていました。ただ、ほかの児童が校庭に残っていました。

昭和三陸津波（１９３３年）で、校庭に船が乗り上げた写真を思い出しました。「子どもたちを逃がして！」。必死で訴え、先生に児童を避難誘導してもらいました。

その後、夫の両親、子どもたちと合流。車2台で避難場所の高台に避難しました。しばらくして、白波が何本も立ち津波が迫って来ました。

私たちは山に向かって石垣をよじ登りました。ところが、先に行ったはずの子どもたちが後ろの私たちを心配して下りてきたのです。

母親の私が波にのまれる姿だけは、子どもに見せられないと思いました。「上さあがれ！　あがれ！」。何度も叫びました。子どもたちがどうにか上に向かった直後、石垣の下をすごい勢いで津波が通っていきました。

震災後、毎日を普通に暮らせることが、一番の幸せだと感じます。

■むすび塾に参加して

静岡・下田市吉佐美

【災害への備え】隣近所の数軒で、近くの裏山へ逃げることにしている。地域の全員を助けることは難しいが、小さい単位なら避難しやすい。

＝進士高広さん㊴

【非常時の不安】児童の登下校途中の災害発生を心配している。子どもの判断力を養い、一人でも逃げられるようにしたい。

＝朝日小校長・高橋美智子さん(53)

【参加して】語り部の話は震災から2年を経た今でも生々しくショックを受けた。どうすれば被災者の傷は癒えるのか。私に何かできるだろうか。

＝民生委員・道家由紀子さん(63)

【災害への備え】地震発生直後に必要なものは、非常持ち出し袋に入れた。避難生活を考えて、食料などは高台の妹宅に預けている。

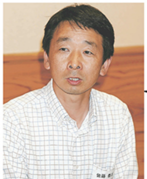
＝青木茂さん(66)

【非常時の不安】東北には「津波てんでんこ」という言葉があるが、現実的には難しい。要援護者の対応を真剣に考えておく必要がある。

＝加藤英樹さん(73)

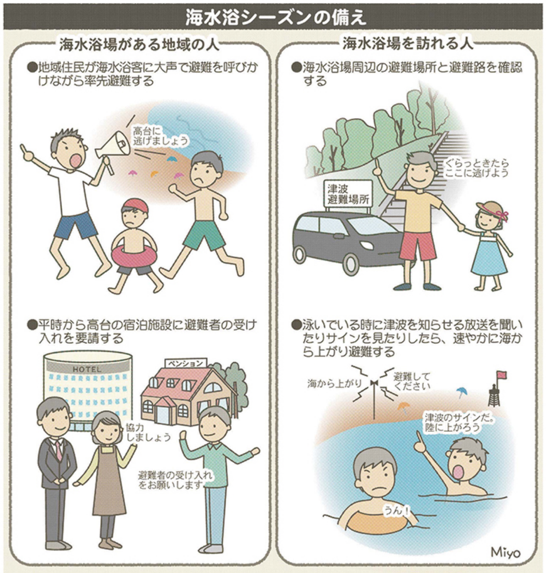
【非常時の不安】津波想定が二十数㍍といわれても、なかなか実感がわかない。避難訓練の際のモチベーションをどう維持するかが課題だ。

＝石井登さん(73)



【非常時の不安】避難訓練のおかげで、児童は意識しなくても体が動くようになった。ただ、危機感が薄まるのが怖い。意識を高めるよう工夫したい。

＝朝日小教頭・佐藤泰志さん㊿



海水浴シーズンの備え

海水浴場がある地域の人

- ●地域住民が海水浴客に大声で避難を呼びかけながら率先避難する
- ●平時から高台の宿泊施設に避難者の受け入れを要請する

海水浴場を訪れる人

- ●海水浴場周辺の避難場所と避難路を確認する
- ●泳いでいる時に津波を知らせる放送を聞いたりサインを見たりしたら、速やかに海から上がり避難する

高台に逃げましょう
HOTEL
ペンション
協力しましょう
避難者の受け入れをお願いします
津波避難場所
ぐらっときたらここに逃げよう
海から上がり
避難してください
津波のサインだ。陸に上がろう
うん！
Miyo

減災・復興支援機構理事長 木村　拓郎さん

逃げる文化 定着を

吉佐美（きさみ）地区は、高台に向かう避難路の整備など自主的な対策が進んでいる。参加者の中には、自宅が被災した場合を考え、高台の親類宅に非常用持ち出し袋を預けている人がいた。非常に良い取り組みだ。

南海トラフの巨大地震は津波到達時間が早く、夜に短時間で来る津波が心配だ。停電に備え、避難路にソーラー充電式の照明を設置してはどうか。防犯灯にもなる。

行楽客への対応は観光地共通の課題だ。海水浴客の避難は、住民が率先避難者となり「一緒に逃げよう」と大声を出しながら、誘導してほしい。避難者の受け入れは、高台の宿泊施設の協力が得られれば、被災直後の混乱を回避できる。

行楽客の意識も問われる。海水浴場をはじめ、津波の危険がある海辺を訪れるときは、避難場所や避難路を地域の人に尋ね、確認する習慣をつけるべきだろう。遊泳中でも津波のサインが出されたら、速やかに海から上がって避難してほしい。

「逃げたけれど、津波が来ずに空振りだった」ではなく「何もなくて良かった」と思えるように、逃げる文化を発信、定着させることが大事だ。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

東北に加え、全国の巨大地震が心配される地域でも開催し、将来の災害に備えを促します。